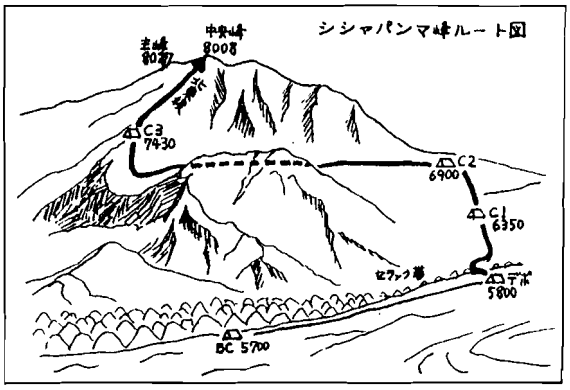
市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会
会長　　大橋秀一郎

No.14　　平成6年7月15日発行　　編集：総務幹事　矢倉　睦

チベット・シシャパンマ峰

<会友>　林　孝治



今春、私は雪豹同人シシャパンマ峰登山隊に参加した。シシャパンマ峰（8,027m、8,012m、8,047m等諸説。ネパール名、ゴサインタン）はランタンリルンの北方20kmのチベット領内にある。ルートは、北面のダスオ氷河から北東稜を辿るものである。

メンバーは隊長の近藤和美（カズヨシ）以下8名で、30歳台2名、40歳台3名、50歳台3名という中高年登山隊である。隊長の近藤は旧ソ連の 7,000m峰5座に9回登頂して、「雪豹」の称号をもらっており、隊名に冠せられている。　ネパール・シェルパ3名を雇ったが、内1名は市大の和田氏とランタンリルンに立ったペンバ・ツェリンで、さすがに有能で強靱であった。他の2名は91年の立正大学隊に参加し、うち1名は登頂していて心強かったが、両名とも不調で、戦力にはならなかった。

さて、4月始めカトマンズに集結した私たちは、まず高度順応のためネパール・ロールワリンヒマラヤのパルチャモ峰(6,273m）に向かった。4月4日、カトマンズからルクラに飛び、キャラバンを開始して、4月8日ＢＣに到着。登山活動は順調に進み、13日と14日に2次に分かれてパルチャモ峰に登頂した。

しかし16日に再度の登頂とFIX等の回収を目的にＣ２を目指していたところ、Ｃ２直下のクーロアールで雪崩が発生した。上野が約20m飛ばされ、左足首を負傷して歩行困難になるというアクシデントが発生。ターモ村まで降ろし、無線で

ヘリを要請して、彼はカトマンズに搬送された。

4月21日にカトマンズに戻った私たちは、再準備と休養に1週間を費やし、27日シシャパンマに向けてカトマンズを発った。シシャパンマは断念か、と心配された上野も捻挫ですみ、松葉杖なしでどうにか歩けるようになって一同ほっとした。

チベットより流れ来るスンコシ川に沿う中ネ友好道路を走り、中国の国境の町ザンムーよりチベットに入る。大地溝帯を登ってチベット高原の端に上がり、中ネ道路から分かれて微かな轍の跡を辿って、29日 5,000mのシシャパンマ大本営に着いた。

5月2日、26頭のヤクとともに大本営を出発。単調でうんざりするほど長いモレーン台地を登り、翌日モレーン上の 5,700m地点に達してBCを建設した。

翌4日より早速登山活動を開始し、強風の中 6,300mのプラトーにC1を建設。6日、7日の両日で 6,900mのプラトーにC2を建設。9日から11日は第3段階で、C2からプラトーをどんづまりまで歩き、北東稜に上がって、7,430 mにC3を建設してアタックの準備は整った。

3日間の休養の後、15日私たち1次隊4名は登頂に向けてBCを出発し、17日にC3に入る。1日遅れで桑原、川原、ペンバの50歳トリオの2次隊が続く。宮崎とシェルパ2名は体調を崩してBCに留まる。上野は、やはり足が不調でBCで静養していたが、秋にダウラギリI峰の雪辱戦を控えているあせりか、1次隊より1日早くBCを出て、順応しながら2次隊に合流して登頂を目指す。

さて、1次隊のアタックの18日朝、BCは入山以来最大の大雪に見舞われたが、C3は雲海の上に出ていて、遙かにクンブの巨峰が頭を出していた。C3を出発し北東稜を辿る。一歩一歩が苦しく、急雪壁ではステップが決まらない所もあったり、ルートファインディングにも時間がかかった。主峰へは 7,800m付近から左へ大雪壁を 500m程斜上して至るのであるが、ここは雪崩事故が多く、登頂者の90%は北東稜をそのまま登って中央峰(8,008m) に立っている。頂稜が雲に覆われ始めたこともあって、私たちもあっさり中央峰を目指した。岩壁を巻いて急雪壁を登る。今にも雪崩そうな恐怖に耐えながらひたすら頂上を目指す。ガスの中に稜線がぼんやり見えたが、比較する物の無い所では距離感を失うのが山の常で、まだまだ遠いと思っていたところ、稜線にひょっこり出た。タルチョ（経文を書いた連旗）が雪下から顔を出していたのでそこが頂上だと気がついたが、やったというよりも何だか気が抜けてしまった。

翌19日には2次隊の3人も登頂した。特に最高年齢の桑原（58）は唯一、C3から酸素を使用しての登頂であったが、わが国では第3位の高齢 8,000m峰登頂

者になった。

上野は2次隊とともにＣ３を出発したが、順応が間に合わず 7,500mで断念。高度障害に苦しみ、サポートを受け、酸素を吸って21日やっとＢＣに帰着して登山は終了した。

今回の登山は比較的天候に恵まれたこともあるが、何よりも近藤隊長の実戦を踏まえた順応理論に基づく戦術により、順応がうまくいったことが最大の勝因といえるであろう。

◆隊　　名　雪豹同人 希夏邦瑪峰登山隊

◆目　　標　中国・チベット　シシャパンマ峰（主峰 8,027m）
なお、高所順応を目的に事前にネパール・ヒマラヤのパルチャモ（6,273m）も目指した。

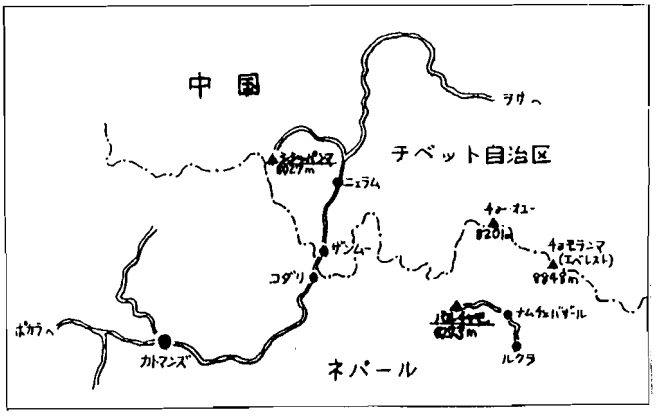
◆期　　間　1994年３月25日～５月31日

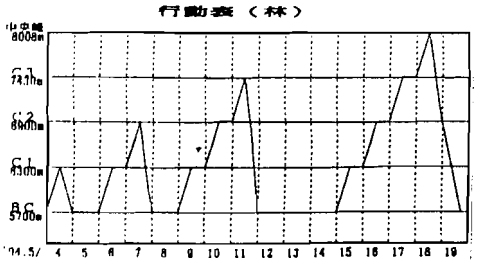
◆隊　　長　近藤和美（52）

隊　　員　倉橋秀都（34）　川原慶紀（53）
桑原　巌（58）　池田壮彦（47）
林　孝治（42）　吉田周一（20）　パルチャモのみ
宮崎　孝（37）　小川瑞穂（19）　パルチャモのみ
上野幸人（40）

シェルパ　キルキン・ラマ　（43）シシャパンマのみ
ペンバ・ツェリン（50）
パサン・シェルパ（32）シシャパンマのみ

◆結　　果　パルチャモには隊員10名全員とペンパが登頂。
シシャパンマには６隊員（近藤、倉橋、桑原、林、川原、池田）と、ペンパが中央峰（8,008 m）に登頂した。





遙かなるキリマンジャロへ

川勝弘一

1993年が世間並みで言う還暦になる。せっかく長い間の山とのお付合であれば、何か後々目立って記憶に残る形の山登りをやろうということで、1年遅れにはなったが、目標をキリマンジャロに定める。某登山専門旅行社に申し込む。3月3日から14日までの12日間。

3月3日成田空港に一行15名集まって初顔合わせ。男性（ツアーリーダー1名を含む）11名。女性4名。年令は22才から66才までバラェティに富む。往復共ルフトハンザで北廻り、フランクフルト経由ナイロビまで。キリマンジャロへの往復はワゴン車でサバンナを突っ走り、ケニヤとタンザニヤの国境を行ったり来たり。　3月4～5日とアンボセリナショナルパークでサファリ、雪の多いキリマンジャロ北面の麓姿を楽しむ。

3月6日より登山開始。登山基地のある、マラングゲートの事務所で手続を済ます。規定として登山者1名に付、ガイド1名とポーター2名を付けなければならないらしい。又、入山人数は小屋の収容人数から1日受付40～50人以内と言う。わがパーティーにはガイド5人、ポーター30人（コック若干名を含む）が付く。ガイドの紹介はあったが、チーフガイドのトーマス君の黒光りした精悍な顔以外は皆同じ様に見えて覚えられない。

小屋には頂上までに下からマンダラ小屋（MANDARA HUT　2,727m）、ホロンボ小屋（HOROMBO HUT　3,720m）、キボ小屋（KIBO HUT 4,703m）と3つある。マンダラHまでは樹林帯、ホロンボHからは灌木帯、その上はステップ帯、更に砂礫帯へと変化する。登山道は一本道でよく踏まれており、迷うこともないので各人好きなペースで登る。従ってパーティーはばらばらで、朝小屋を出発したら全員が再び顔を会わすのは次の小屋の夕食時である。マラングゲートからマンダラHまでは約4時間くらいだが、高度順化のことを考えて出来るだけゆっくりしたペースで登るように注意される。登山者はドイツ人が多く、ノルウェー、アメリカからも来ていて国際色豊かである。ばらばら下山してくる中に日本人を見つけると、頂上付近の様子を聞く。「いやぁ、ひどい目にあいました」と一様に答えるので、高度障害をひどく意識する。

ホロンボHに2泊して、1日は休養。高度順化を兼ねて 4,300m地点まで往復する。翌日ホロンボHを出て 4,300m辺りで休んでいた時、妙令の白人女性が寄ってきて、頭痛薬は持っていないかと尋ねる。持参の薬を渡したら、夫もそこで吐いていると嘔吐の仕種をして岩陰に消えていった。いよいよ高度障害の犠牲者

が出て来たかと緊張する。

マウエンジ峰とキリマンジャロの鞍部は、鞍部というより木の１本も無い砂漠の様なだだ広い場所で、セスナ機ぐらいは離着陸出来ますなぁと話し合う。キボ小屋が見え出して、もう数百ｍぐらいの距離と気持ちははやるが体が前に進まず情け無い思いをする。キボＨは下２つの三角屋根の木造と違って、石壁をもった大きくてがっしりした造り。トイレのみ外にあって、崖淵に宙に浮く様に建っている。日本ではお目にかかれないしろ物である。高度順化の為、一度 5,000ｍぐらいまで上がる。ひどいザラ場で踏跡はぐつぐつ崩れて登り難い。見上げると、5,685ｍのギルマンズポイントの下辺りまでずっと続いている様だ。この登路のある東面は雪殆どなし。食欲の無い夕食を早めにすませ19時就寝。外を吹き荒れる風の音が耳について寝つかれない。

いよいよ３月10日頂上アタックの日。午前１時ヘッドランプと防寒具に身を固めて一列になり出発。列の間々にガイドが入り歩き出したが、気の付いた時は暗闇の中で、ばらばらになる。 5,000ｍを越した辺りからは、数歩登っては、ストックにもたれて休むことの繰り返しで、這う様に前進する。傾斜もかなりきつい。側にはいつの間にかガイドのビュータス君が付いて励ましてくれる。６時頃か東のマウエンジの岩峰から日の出だとガイドが教えてくれ、やっとのことでカメラを取り出してシャッターを切る。

もうそこがギルマンズポイントだという大きな岩を登り切ると、２～３人のメンバーの顔が見える。そこにいた若いメンバー２人と更に最高峰ウフルピーク（5,896ｍ）を目指す。火口壁の氷河の縁をトラバースして、やっとのことで９時35分アフリカ大陸の最高峰に立つ。このウフルピークまで登ったのは14人中５人であった。しかしギルマンズポイントからここまでは本当につらい登りで、ガイドが軽便O_2ボンベを吸わせてくれたが、離すと元の木阿弥である。空気が薄いとは、こんなにも体の自由がきかないものかと実感する。

頂上で氷河の景観を暫く楽しんで下山にかかる。空は真っ青、氷河は真っ白で、その間を睡眠不足の体をひきずる様にしてキボＨに到着。昼食は用意してあったが喉を通らず、ジュースのみ飲んで、預けてあった荷物を詰替え、ホロンボＨへ下る。日の長いアフリカの太陽も傾き、殆どの登山者も先に下って人気の無くなった静かな道を、偶々一緒になったポーターの少年と２人、前に聳えるマウエンジの岩峰の景色を楽しみながら、赤茶けた砂礫の道を下って行った。かなり時間を食ってホロンボＨへ着いたのは18時20分。17時間余りの行動時間になる。

小屋では、ギルマンズポイントからの下りで失神してうわ言を言い出したメンバーの20代の女性を、ガモウバックに入れて応急手当中で、ツアーリーダーはガ

と共に今夜中にマラングゲートまで下ろすと言う。翌日アルーシャのホテルへ着いたら、今度は40代の男性が高熱で倒れる。地元の医者はマラリヤと診断したが、ともかくも３月13日夜全員揃ってナイロビから飛び立った。やはりここはアフリカの高山であることを実感させられた旅であった。

利尻岳東稜

矢倉　睦

ゴールデンウィークに利尻へ飛んだ。一度は登ってみたいと思っていた山だ。岡田昇の写真を見てゾクゾクした人も多いことだろう。伊丹より千歳へ、そして稚内への空の旅。翌朝８時半に鴛泊行きのフェリーに乗る。雪がチラチラ舞っており、寒いの一言。最果ての地はこんなにも気温が低いものかと認識する。

４月30日　フェリー待合室にて身支度・デポの後、出発。同じフェリーでやって来た登山客はかなりの数だが、いろんなルートに分散する様子だ。バスを逃してしまったのでタクシーにて鬼脇へ。この島の道路は島を一周する道路だけである。駐在所へ登山届けを出しに寄ったところ20分余りの注意を頂く。さらに５分程タクシーにて林道を入る。

ヤムナイ沢はまだ雪一色。少し登った後東稜に取りつく。しばらくは灌木帯だがすぐに無くなり、ゆるやかな稜線歩き。の、地形ではあるが、北からの風が凄まじく、雪が吹きつけほとんどまっすぐ歩けない。右頬は痛いし、視界も真っ白だ。５月でこうなのだから厳冬期にはと恐ろしくなる。そろそろテントサイトを見つけたいが、ヤムナイ沢側はハイマツですぐに切れており、なかなか難しい。とはいえ、この烈風のなか幕営する気になど到底なれない。なんとかヤムナイ沢側で見つけた所は風が来ず天国であった。しかし不気味な風の音は一晩中響いている。 700mあたりか。

５月１日　朝起きるとコンロの調子が良くない。とうとう火が出なくなってしまった。東稜〜北稜縦走の予定を東稜よりのアタックに変更する。視界は相変わらず良くないが、雪も止み、風はだいぶ弱くなっている。南稜を間近に見れる当てがはずれて残念だ。

後ろにいたスキー利用の２人パーティーはなんと直下型の雪洞を作ったようだ。風避けブロックも作ってあるが、大変だったことだろう。

1,000mを越えるあたりから細くなり、面白い稜線歩きとなる。視界が悪く地形がわからずロープも2度ほど出す。変化に富んだ地形である。風が強い為、雪はクラストしておりラッセルはほとんどない。岩に付いている雪もエビのシッポが巨大化したものだ。本州の山との違いを感じる。

10時頃より視界がよくなりはじめ、やっと南稜が見え出した。バットレスの基部で順番待ちをしているパーティーがある。全容はやはり見えない。
傾斜が増し雪壁となり、ピークが見え出した。このころにはやっと青空が見え始める。利尻のピークは二つあり、北峰が 1,718.7m、南峰が 1,721mと地図には書いてあるが、北峰が本峰である。見上げる二つとも変な形をしており、南方はコインを立てたような薄っぺらい岩に雪がついただけのように見える。北方はやはり岩の固まりをドンと置いたようだ。我々はアタックなので、南峰のみ、こっちの方が高いのさと言いながら、細い稜線にびくびくしつつ到達。本当に細い。北峰に取りついているパーティーは少し手こずっているが無事消えていった。あれを登っても降りるのは懸垂だったことだろう。

後は一直線に下山。途中デポを回収し、取付あたりで一泊、名残を惜しむ。

翌朝下山し、鴛泊へ戻ってきた。此処から見る利尻は本当にゆったりした壮大な山だ。南稜の岩峯が林立する姿とは対照的である。

さらに翌日、レンタサイクルにて利尻島一周60kmを走ったが、場所場所により姿を変えるこの山は非常に魅力的である。力のあるパーティーならばベースを置いて、いろんなルートがとれるだろう。とは言っても、やはり最果ての島、遠いのである。

メンバー：　尾形達也、矢倉　睦

★　★　★　★

第２回「立山自然の旅」　　島川　勝

期　間　平成６年４月29日～５月４日
宿泊先　雷鳥荘
参加者　三島夫妻、山本、藤本夫妻、上堂、久保田、山辻、岡本夫妻、佐々木
　　藤村、島川、三女 晶子、大島諸氏

第２回立山の自然の旅の案内を頂きながら返事を出すのを忘れていたところ、大島さんより誘いの電話があって参加することにした。高３の娘がスキーに釣られて行くと言い、嬉しい気持ちになって連れていったのが、後で皆さんに迷惑を掛けることとなってしまった。

趣味が嵩じて旅行業の免許まで取ってしまった佐々木さんの手配はさすがと思わせるものがあり、大阪から美女平まで乗換なしに、窓の外は雪が残る春の山を楽しみながら列車の旅ができた。今年も雪は多く、室堂までは雪のトンネルを曲がりくねりながら辿り着いた。室堂で先着組と落ち合って雷鳥荘まで歩いたが、昨年は吹雪かれて顔が痛かったが、今年はそれほどでもなく、快適だった。

雷鳥荘の温泉で疲れを取り、佐々木さんが二段ベッドの下で入れてくれるコーヒーを何杯も飲んで、ワイワイ山の話をしていると、山の世界が蘇ってくる。

翌日晴れたら、雷鳥沢を登り、剱の見えるところまで行こうという話になったが、早朝なので弁当の用意ができないというので、ここで市大山岳部の実力発揮とばかりに、夕食のとき何回もお代わりする振りをして、朝食を仕込んだ。

翌４月30日は快晴とはゆかないが、歩ける天気だったので、雷鳥沢を登り大日の方に向かった。稜線では剱岳が岩と雪のその雄姿をみせた。一回生の夏、靴擦れと肩に食い込む荷物でフラフラになりながら歩いた大日の稜線、大雪で胸までのラッセルに苦しめられた早月尾根、剱はいろんな事を思い出させてくれる。

雪の登りは急なところもあり、初めて 3,000m級の山に連れてきた娘の足元が心配になってきたころ、藤本さんのそろそろ引き揚げようという声でホッとした。帰りはアイゼンがすっかり団子になってしまった。

昼からは、室堂から天狗平のあたりまでスキーで下ることになり、久保田、藤村さんと娘とで出掛けた。室堂から快適に滑れるものと思っていたところ、斜滑降ばかりが延々と続き、娘は足が痛いといって雪の上に座り込み、久保田、藤村さんには随分迷惑をかけた。それでも、後半になると意外に元気を出し、無事にコースを終了した。

翌５月１日は天気が悪くなるというので、三島夫妻、藤本夫妻、久保田、藤村、島川は下山。山本、上堂、佐々木、大島さんは剱沢にテントを張ると言われていたが、天候が良くなく、小屋で沈澱の日が続いたように聞いている。

山辻さんは、５月３日から５日まで入山され、特に４日は快晴で素晴らしい山と雷鳥の写真が撮れ、医院に展示してあるそうです。

昨年に引き続き今年もこの企画をしていただき、コーヒー、ラーメンと名コック振りを発揮していただいた佐々木さんや、お世話いただいた皆さん、大変有り難うございました。

♡ 初めてのボート祭 ♡

―― 日立製作所　花のＯＬ美女軍団　倉橋・柳川・中島・藤井 ――

今回初めてボート祭に参加させて頂きました。今までこのような大規模な行事が大川で行われている事は知りませんでした。参加させて頂いて、初めて、大変歴史のある、有意義な大会であるという事がわかり、驚きました。公園から応援させて頂いていても、ボートは５人のチームワークがとても大切で、全員の呼吸が合うまでは難しそうに見えました。しかし、ひとたび呼吸が合えば、気持ちよく、湖上を気分よく進めるように感じました。また、青空のもと、クルー全員が持てる力を出せば、一人では到底得ることのできない力で漕がれていくボート競技は水の上を水スマシのように進んでいく。この姿が大変素晴らしく、美しい絵を見るようでした。

しかし、実際に自分が漕いでみると、チームワークは何処やら、早く漕ごう、早く漕ごうという気持ちばかり焦り、見るとやるのでは大違いということを、嫌というほど実感させてもらいました。他のクルーの方々にご迷惑をおかけしたと少々反省しています。

このような大変貴重な体験をさせて頂いた、山岳会の方々、大会関係者の方々、そして、お誘い下さいました西村さんに心よりお礼申し上げます。

今後もボート祭が益々盛大に行われ、人と人との温かい心のふれ合いが、いつまでも続きます事をお祈りしております。

参加させて頂き、楽しい思い出を作らせて頂いたことに対して、深く感謝致しております。

注：皆さんは大島氏の応援で来て下さった方達だそうです。

ボート祭参加４年目にして、初勝利を上げることが出来ました。
３年間、幹事としてご尽力頂いた八木君、ボート祭に命をかけて頂いた清原さん、本当におめでとうございます。ご苦労さまでした。来年以降も２回戦突破を目指してよろしくお願い致します。

初勝利の栄えあるクルーは次のとおりです。

コックス：柳川、整長：清原、３番：藤川、２番：苑樹、バウ：西村

（西村　記）

第２回「初登頂 大いに語ろう会」
（四光峰初登頂５周年記念）報告

平成６年４月16日（土）～17日（日）

４月中旬の比良山にこんなに残雪があるのは、２月の大雪のせいだろうか。四光峰初登頂から早いもので５年がたった。東京から佐藤隊長、岡山から武部の参加があり、「初登頂大いに語ろう会」の集会を行った。集合場所は、比良山の広谷にある高津高校の山小屋である。現地集合と言うことで、参加者はそれぞれの都合に合わせたコースで夕刻には全員小屋に集まった。小屋主の藤本先輩、奥さんのお世話で鍋物（豚しゃぶ）をいただく。この集まりに備えて、奥さんには小屋の下見、買い出しと大変お世話になった。薪ストーブの燃える小屋でたらふく食い、たらふく飲んだ。山小屋、山の仲間、鍋物、酒、うまいんだなこれが。

でも、参加者がちょっと少なかったのは幹事の段取り悪さかな！　次回はもっとにぎやかになることを期待しています。

参加者：　藤本夫妻、佐藤、奥田（寛）、和田、福山昇二、武部、小倉、
矢倉、尾形　　（福山　記）

ＯＣＵＳＡ報告および現役状況について　　尾形達也

６月18日（土）、市大田中記念会館にてＯＣＵＳＡ定例総会が開催され、山岳会からもＯＣＵＳＡ副会長でもある大橋会長、佐々木、大島、小松、尾形の５名が参加しました。平成５年度事業報告、収支決算報告、平成６年度の計画、収支予算案が審議された後、優秀クラブ、優秀選手の表彰が行われました。

この後、新装落成なった野球場スタンドのクラブハウスの見学会が行われましたが、山岳部の部室は、この工事に伴い、現在プールの北側に移転しています。なお、気になる現役部員のことですが、在籍している３名の部員（高尾、西野、中西）は来年春には全て卒業の見込みで、このままでは部員が一人もいなくなる危機的な状況となっています。この半年の内に、来年以降の山岳部を担う若者の入部が期待されるところです。

比叡山横断のご案内

企画運営幹事

西　村

今年の日帰りハイキングは、道中、幾多の史跡が見受けられ、歴史の道のなかでも歩いていて、気分をなごましてくれる、比叡山の横断コースを計画しました。久々に尾根歩きをして、思う存分自然を満喫してみませんか。

記

１．日　　時	９月１５日（木）祝日　　９：００～１７：００
２．集合場所	叡山電鉄・修学院駅　午前９時 京阪電鉄・淀屋橋～出町柳～修学院（約７０分）
３．参加対象	山岳会員及び会友とその家族（小学校３年生以上）
４．参加費用	無　料　（但し、往復の交通費は個人負担）
５．行動計画	修学院駅（９：００）～千種忠顕碑～（１１：３０）比叡駅～ （１２：３０）延暦寺駅～（１４：００）夢見が丘～（１５：００） 滋賀里（京阪電鉄）～浜大津～（１７：００）淀屋橋
６．持参物	昼食・水筒・非常食・替え下着（上下）・替え靴下・セーター 懐中電灯・雨具・地図（京都東北部：５万分の１）
７．雨天時の 連絡先	幹事・西村（☎０７２９－８８－０８６３） ＊当日午前６時に小雨並びに雨天のときは中止します。

スキー三昧～顛末記

小松　稔

職場にスキー部というクラブがあることは昔から知っていたが、どんなことをしているのか、余り考えたことはなかったし、必要もなかった。どうせ、ゲレンデでチャラチャラしているだけだろうと、気にもとめていなかった。

90年の夏、長期休暇の件で職場とやりあって、山へ行くためには喧嘩か、長い目で見た環境作りが必要だと感じた。すかさず職場の登山部なるものに入部したが、やはりそれはハイキング部で、目指す登山の母体とするには時間が必要だし、可能か不可能か。同時に、四光峰で一時考えたスキー滑降が頭をよぎった。今の内にスキー技術を高めよう。ひょっとしたらそのうち誰も滑降したことのない山に登れるかもしれない。

電話をすると、「競技と基礎に分かれてやってます。」と言われ、なんのこっちゃかよくわからないまま総会に参加した。「週２回の練習に出てこいよ。」、行ってみると、いきなり耳が聞こえなくなるくらいに疲れて、ビールが旨い。久し振りに仲間を得た気分になる。そうして練習に参加しているうち、「スキーを巧くなりたかったらまずは競技やで」と言われ、92年新年早々からレーシングキャンプ～国体予選と参加した。「競技はなんと面白いねん」。みんな本当に真面目である。１分かかるコースを何度滑っても１～２秒しか変わらない。本当に実力がそのままでてくる。とにかく、レベルの低い大阪府であろうが、代表として国体に参加できるくらいまではやりたい。スキーは特に短期集中型のトレーニングが有効である。92年から94年の３年間で90日以上を雪の上で過ごした。と言っても長くて１回に１週間、普通は２～３日のスキー行きを重ねてだ。まとめて年休を取ったらおこられるが、これなら文句あるまいと、90年に山へ行けなかった腹いせも含め、スキーに行きまくった。

先輩が「競技だけやのうて基礎もせえよ」と言う。92年に２級を、93年に69.66点で惜しくも逃した１級も94年に取得した。今なら片足でも、小回り、大回り、カービング、その辺の奴には負けない自信がある。とりあえず、準指・指導員への道は少しおいといて、競技に専念することにした。

94年３月６日に大阪府の選手権当日を迎えた。シーズン３戦目である。明日には神鍋大会、来週に乗鞍ダウンヒル、野麦峠の大回転とエントリーしている。午

前中に行われた選手権は無難にゴールイン。明日の大会には確かな手応え、上位入賞に向けて気合が入る。昼からフリーで調整、と思いきや、雪面のうねりにひっかかり大ジャンプ・・・ぐしゃっ・・・眼鏡が・・・ゴーグルが・・・・「げっ・・頭から血が・・・・」幸い出血はすぐに止まる。よかった笑い話で済んだか・・・・「あっ・あし・・足が動かん！・・・・」

スキーに行きすぎたばちがあたったのか。少しは大人しく家におれよと言う忠告か、入院、手術、そして一月の松葉杖生活、秋には抜釘手術をしなくてはならない。

これに懲りてスキーを止めるのだろうか？　それとも・・・？

・・95シーズンの小松君を乞うご期待！

＊　＊　＊　＊

＜会員消息＞

昭和７年学部卒　山田親英氏が、去る４月７日ご逝去されました。
心よりお悔み申し上げると共に、慎んでご冥福をお祈り致します。

★★★　編集後記　★★★

７月１日発行の予定が少し遅れました。お待ち下さっていた会員の方々、どうもお待たせしました。（えっ、別に待ってませんでした？）

さて、そろそろ夏休みが待ち遠しい今日このごろですが、もう計画はお決まりでしょうか。私は、北海道に惚れ込んだ旦那が、どうしてもまた行きたいと言い張るので、北海道自転車の旅となりそうです。去年は五島列島に自転車を持ち込んだのですが、台風に当たって缶詰。今年はどうなることやら。雪の季節には、また是非北海道の山に登りたいものです。　＜編集　矢倉記＞